

氏 名	いけ がみ き み こ 池 上 貴 美 子
学位(専攻分野)	博 士 (教 育 学)
学 位 記 番 号	論 教 博 第 70 号
学位授与の日付	平 成 9 年 3 月 24 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 2 項 該 当
学 位 論 文 題 目	早期乳児の顔の模倣の発生的機序に関する研究

論文調査委員	(主 査) 教 授 坂 野 登	教 授 岡 田 康 伸	助教授 子 安 増 生
--------	--------------------	-------------	-------------

論 文 内 容 の 要 旨

生後1カ月の乳児はすでに、母が舌を出し入れしたり口を開閉したりすると、その行動を模倣することができる。論者はこの模倣行動の解明の中に、今日の発達心理学の新しい研究動向が象徴的に含まれていると考え、本研究の意義をまず強調している。本研究は、人の幼体は早期から、記号による間接知覚を介さずに、自分をとり巻く世界の意味や価値を直接知覚することによって、環境と対決する存在であるという Gibson, E. J. の立場に立って行われる。第Ⅰ部「理論編」では、発達心理学の方法論と認知発達のかえ方についての展望を行った後に、上記の結論を導き出している。

第Ⅱ部「早期乳児の顔の模倣に関する実証的検討」では、9つの実験が紹介されている。第1実験では未知の人のモデルによる模倣場面で、乳児が愛着対象と共存する可否かの対人的条件が検討され、生後1か月では共存する人物による影響はないが、3, 7か月では一人で置かれたり見知らぬ人の膝に抱かれたときよりも、母親の膝に抱かれたときの方が模倣がよく生じることが明らかにされた。また第2実験からは、母親が隣にいて抱かないときよりも母親の膝の上の方が模倣は生じやすいことがわかった。次に顔の模倣に関する刺激要因の検討が行われた。第3実験の1, 3, 7, 9か月児についての舌出し模倣の研究では、単なるモノ(長方形)の上下動には模倣は生じにくい、顔の中での動きには生じやすいこと、さらに第4実験では実際の人らしさを備える顔刺激と目だけの顔における紙片の舌出し様運動には模倣は生じやすいが、人らしさを備えない乱顔や輪郭顔における紙片の舌出し様運動は、模倣を生じさせにくいことが明らかになった。

続く第5実験では、1か月児を対象にして顔刺激の動きの要因が検討され、舌の静止条件では人らしさへの選好はあらわれにくく、認知的探索活動が優位となるが、動作条件では模倣、注視、発声、微笑などの対人的な情動行動を含む人らしさへの選好があらわれることが明らかになった。第6実験では乳児がモデルの舌出しを見て(視覚)、自分の舌を出す(触運動)という異感性間の協応のメカニズムの検討が行われた。

最後に、第7実験から第9実験にかけて、顔の模倣に関する、成熟か経験かという個体要因の検討が、

早産児と満期産児の比較を通して行われた。その結果第7実験では、満期産児が人らしい顔図版を選好して模倣を生起するのに対して、早産児は、明暗の複雑性が等価な乱顔に対しても模倣を生じさせやすかった。第8実験ではさらに、未熟児センターから退院間近い早産児が対象とされ、早期胎外経験の重要性が明らかとなった。最後の第9実験では、胎齢40週前後で出生した、満期産新生児について顔図版に対する反応の検討を通して、胎内（満期産児）と胎外（早産児）の経験の質が検討されたが、その結果外界との交渉という胎外経験が、異感性間協応を準備させるものであることが示唆された。

論文審査の結果の要旨

生後間もない乳児は、対面した人の舌の出し入れを見てそれを模倣しはじめる。乳児は自分の顔を見ることができないので、自分が模倣していることを目でもって知ることはできない。知ることのできるのは自分の舌が出し入れされることから生じる、筋運動感覚だけである。この筋運動感覚の変化と、対面した人の舌の動きという視覚的变化とを、対応させるという異感性間協応の存在が、模倣を可能にさせる条件であるといえる。舌の出し入れという奇妙な動作の模倣の中に、現在の発達心理学が直面している、多くの問題が集約されていると論者は考えるのである。この模倣能力はともすれば、乳児の初期能力のすばらしさの一つとしてのみとらえられがちであるが、それは乳児の環境との関わり合いの姿そのものであり、生得的なものと獲得的なものの関係を、具体的に解明していく上での鍵となるような行動である。

それは具体的には、人の顔に対する乳児の認知能力と、愛着体験との関わり合いとしてあらわれてくる。乳児は舌という対象の動きだけに反応するのか、それとも顔に象徴される複雑な図形的要素に興味を示すのか、それとも複雑さだけではなく、しかるべきところに目、鼻、口などが配置された顔刺激が必要なのか、そこに関与する成熟的条件とはどのようなものか、或いは乳児がどのような環境的条件に置かれたときが、もっとも模倣的行動は生じやすいのか、このような問いが生じてくる。本研究は、上記の問いに答えるべく計画された一連の実験的観察から成っている。

そもそも生後一か月から11か月の乳児を対象にして、短時間とはいえ顔刺激に対して注目するという、一定の精神的肉体的状態に乳児を置くことは、乳児にとって未知の他人である論者にとっては至難の技である。むずかりもせず眠くなりもせず、また興奮しすぎもしない、適度の目覚めの状態に乳児がいる必要がある。さらに母親や病院の理解と承諾を得る必要がある。一つの観察が終われば新しい調査計画の下で、新しい乳児を探さなければならない。本研究は実に、20年以上の年月をかけて行われた努力の結晶である。それは努力だけで達成されるものではなく、綿密な調査計画と結果の検討を経た、新たな方向への研究の展開を行う上での論者の、研究能力の高さのあらわれであるといえよう。本研究は、顔が人を代表する刺激であり、人と人の中で模倣が生じるということは、対人関係・情動的側面、すなわち自己・他者関係、人についての表象・愛着対象の成立に関する実験から出発する。次いで人は動く刺激であり、自ら動きを伴う反応であるという観点から、動きを伴う人の顔に対する模倣の研究が行われる。さらに模倣反応と注視反応の関連の分析から、乳児がモデルを見て自分の舌を出すという、視覚—触運動間の協応のメカニズムの分析へと研究は進んでいる。研究は最後に、早産児と満期産児の模倣行動の比較から、成熟か経験かという、発達心理学上の基本的問題の解明へと向かうのである。

以上述べたような方向へと研究は進み、自らが設定した問いに対して答え得る、すぐれた成果を収めることができた。この点本研究は、人間理解にとっての重要な鍵概念を与えたものとして、高く評価することができる。ただ本研究が長年にわたって行われたために、資料の分析方法が不統一であったりする箇所が、いくつか見受けられる。また論者の拠って立つ立場を、完全に示すだけの資料が十分に整ったとはまだいいがたい。しかしまだ解明されていない部分が多に多い、乳児研究においてこれ以上の要求を現在、論者に対して行うことは不適當であろう。

まとめるならば、早期乳児の顔の模倣の発生的機序に関する本研究は、これまでにない新しい知見を提供することができた点、高く評価することができるものである。

よって、本論文は博士（教育学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成9年1月16日、論文内容とそれに関連した試問を行った結果、合格と認めた。